

2-1 伊能忠敬から始める地図測量史跡めぐり (距離約 14.0km)



几号水準点 (ニコライ堂)

上野の伊能忠敬の墓などから始めてお茶の水までの地図測量史跡をたどる。

【道順】

00JR 上野駅谷中口→01 玉川兄弟の墓 (聖徳寺) →02 伊能忠敬墓・高橋至時墓など (源空寺) →03 几号水準点 (金杉三島神社) →04 正岡子規の地図 (子規庵) →04-1 几号水準点 (日暮里天王寺 柱石) →05 木村信卿墓 (谷中墓地) →06 川上冬崖墓 (谷中墓地) →07 岩橋教章墓 (谷中墓地) →08 几号水準点 (谷中浄名院 柱石) →09 村上島之允 (秦憶丸) 墓 (玉林寺) →10 几号水準点 (上野東照宮) →11 三等三角点「大学」 (東大教育学部屋上) →12 一等水準点 N0-17-003 (東京大学赤門前) →13 几号水準点 (湯島天神) →14 松浦武四郎旧宅? (外神田、神田明神傍) →15 二等水準点 N0-17-002 (東京医科歯科大学北路上) →16 一等水準点交 4 号 (お茶の水橋南西) →17 几号水準点 (ニコライ堂) →18JR 御茶ノ水駅

【街歩き解説】

00JR 上野駅谷中口

01 玉川兄弟の墓 (聖徳寺) : 玉川上水開削者で有名な玉川兄弟は、東にした線香を竹竿にくくりつけたものや提灯の明かりを利用して夜間に測量をしたといわれる。

02 伊能忠敬墓・高橋至時墓など (源空寺) : 「大日本沿海実測全図」、いわゆる「伊能図」を作成した伊能忠敬の墓の隣には、師の高橋至時墓なども並んでいる。



伊能忠敬と高橋至時の墓

03 几号水準点（金杉三島神社）：明治初期、イギリスの測量技術の影響を受けて「几号水準点」が設置される。三島神社の玉垣石柱に刻まれたものは、今は敷石になっている。



几号水準点（金杉三島神社）

04 正岡子規の地図（子規庵）：子規庵には、「一束の地図」という彼が愛蔵した地図の束が残されている。中には、手彩色された『松山』の地図もあるという。

04-1 几号水準点（日暮里天王寺 柱石）：一部破損しているが、柱石状の頂に「不」文字状がある、谷中浄名院と同形のもの。

05 木村信卿（谷中墓地）：木村信卿は、創生期の陸軍参謀局にあって地図作成に功績を残した。ところが、陸軍におけるフランス派とドイツ派の対立から「清国地図密売事件」の首謀者として職を解かれる。

06 川上冬崖（谷中墓地）：明治洋画壇の重鎮川上冬崖は、一時陸軍省兵学寮で地図技術者に図画教育をする。彼の教育を受けた測量師らによって、色鮮やかな「迅速測図」が作成された。そして、「清国地図密売事件」に関連して、熱海で謎多い最期を迎える。

07 岩橋教章墓（谷中墓地）：幕末期、航海用沿岸海図の絵図方として活躍した。その後、銅版画や石版画の技法をウイーン地図学校などで学び、帰国後は紙幣寮、内務省地理局勤務となり、多くの銅版や石版技術者を育成した。

(岩橋教章と絵画のこと) 岩橋教章の手になるものとして、従軍画家を思わせる「函館戦争絵図」(1869年ごろ)という作品が残されている。そのほか、三重県立美術館には、杉板に吊された本物の鴨と見あやまるほどの精緻な教章の作品「鴨の静物」がある、この絵は、ウイーンから帰国した翌年に、病室の板壁に吊された病中見舞いの鴨を描いたものである。当時のヨーロッパには、精緻に静物画を画く風があり、これを引き継いだものというから、在欧中に同様の絵画にも接する機会に恵まれたと思われる。



岩橋教章の「鴨の静物」

明治10年「銅板絵入 懐中東京案内(福田栄造編)」には、「有名銅版所」や銅版を成すものとして岩橋教章の名がある。明治14年には、内国勸業博覧会審査官となった。

子息岩橋章山(1861-?)は、内務省地理局の5千分の1「東京実測全図」を版彫刻で作成した(明治18年~20年)。明治22年には、参謀本部製図課に在籍。陸地測量部修技所で銅版を教授した。

08 几号水準点(谷中浄名院 柱石) : 谷中浄名院の几号水準点は、柱石状の頂に「不」文字状のものが刻まれた特異な形式のもので、とても風格がある。



几号水準点(谷中浄名院 柱石)と几号水準点(日暮里天王寺 柱石)

09 村上島之允(秦憶丸)墓(王林寺) : 村上島之允(秦憶丸)は、伊勢の人で幕府役人、間宮林蔵の師。村上は、測量家で林蔵の師でもあった。伊勢国宇治山田に生まれ、地理に詳しく、画も巧みであった。天明8年(1788)松平定信に見出されて、幕吏として各地をめぐり土木工事、絵図の作成に当たっていた。

後に間宮林蔵とともに関東各地や蝦夷地を巡り、彼に地理・測量の指導をしたと思われる。寛政10年(1798)から文化3年(1806)まで、普請役御雇いとして近藤重蔵らと蝦夷地を踏査、植林・農耕を指導し地図を作成し、初期の北海道開拓に尽くした。1807年の大目付中川忠英の巡察に普請役となって随行して蝦夷地を訪ねたのが最後の旅であった。

著書には、「蝦夷島奇観」、「蝦夷見聞記」、「蝦夷地名考」などがあり、アイヌの習俗などを忠実に紹介している。文化5年(1808)に48歳で亡くなった。

10 几号水準点(上野東照宮) : 上野東照宮の入口鳥居下に、平面形の几号水準点がある。



几号水準点(上野東照宮)と几号水準点(湯島天神)

11 三等三角点「大学」(東大教育学部屋上) : 許可なくして立ち入ることはできないが、東大教育学部屋上には、三等三角点がある。東大でも?一等ではない。

12 二等水準点 N0-17-003 (東京大学赤門前) : 赤門の前には、全国に約2万点設置されている高さの基準となる水準点がある。これは二等。

13 几号水準点(湯島天神) : 湯島天神の鳥居にも几号水準点が刻まれている。

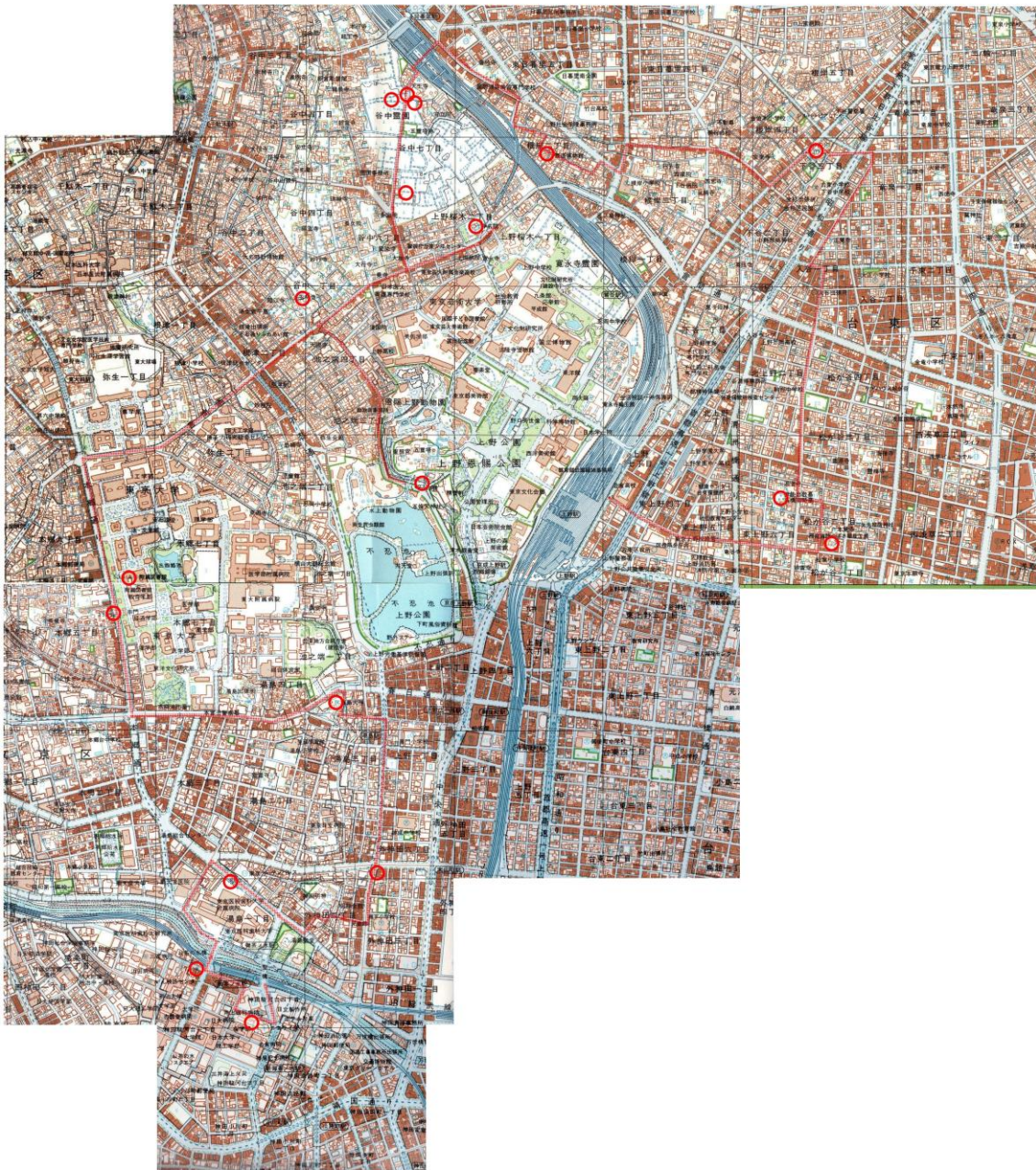
14 松浦武四郎旧宅?(外神田、神田明神傍) : 蝦夷地探検をして地図を作成した松浦武四郎は、明治政府の役職から離れた55歳のとき、神田五軒町に新居を構え、各地の寺社から集めた古材によって一畳間書斎を増築する。老後は、この日だまりで過ごしたという。一畳間書斎は、三鷹の国際基督教大学の敷地内に保存されている。



松浦武四郎旧宅辺り「江戸切絵図」

- 15 二等水準点 N0-17-002（東京医科歯科大学北路上）：「道路基準点」と呼ばれる主要国道に 1km 間隔で設置された金属標の二等水準点である。
- 16 一等水準点交 4 号（お茶の水橋南西）：市街地では歩行者の安全を考えて（柱状の水準点標石が）地下に埋められている。
- 17 几号水準点（ニコライ堂）：少々発見できにくい場所になるが、ニコライ氏建物の礎に几号水準点が刻まれている。
- 19JR 御茶ノ水駅

ルートマップ



玉川庄右衛門（たまがわ しょうえもん ?-1695）

玉川清右衛門（たまがわ せいえもん ?-1696）

玉川上水開削者。

徳川幕府も三代将軍家光の頃（1623 年～）になると、諸国の二百数十の大名の参勤交代の制度もすっかり定着して、江戸には大名やその家臣が屋敷を構え、商人や職人も定着し、人口はふくれあがり、従来の上水だけでは江戸の台所の水は賄えなくなってきた。

徳川四代将軍家綱時代の承応元年（1652）幕府は、武蔵川越藩主で老中の松平伊豆守信綱や町奉行神尾備前守によって、多摩川から江戸に上水を引く計画を立てた。ところが玉川上水工事は、当時芝に住んでいた庄右衛門、清右衛門兄弟から願い書が提出されこれを受ける形で、関東郡代伊那忠治が水道奉行となって実施に移された。このとき、幕閣の反対を押し切って、この願い書を取り上げたのは名君保科正之だという。

承応 2 年（1653）4 月から着工された工事は、羽村の取水口から四谷大木戸まで約 43km、標高差約 92m を、鍬、ツルハシ、もっこ程度の道具だけで、僅か八カ月で工事を完成させた。上水は、四谷大木戸から、さらに石樋や木樋を使って江戸城下の町々へと配流されて、市民の水需要に応えた。これが完成したのは承応 3 年 6 月であった。

工事は、「水喰土（みずくらんど）」と呼ばれる地（断層か）で、水が地中に吸い込まれる事態に陥るなどのことから、当初予定していた取水地点の変更を余儀なくされるなど、苦難の連続で、幕府からの六千両の下賜金も使い果たし、兄弟が私財を投げ打って完成させたといわれる。工事完成後、工事を担当した兄弟には苗字（玉川）帯刀を許され、上水の維持管理の役、今でいえば水道使用料の徴収権を獲得した。

工事に際しては、ゆるやかな勾配を持つ水路を掘るために、しっかりとした測量の技術が必要であった。そのときの玉川兄弟の測量は、束にした線香を竹竿にくくりつけたものや提灯の明かりを利用して夜間に行ったといわれ、当然地図も重要な働きをしたと思われるが、詳細は明らかになっていない。

墓碑は台東区松ヶ谷 2-3-3 聖徳寺にある。（「地図測量の 300 人」から）

伊能忠敬（いのう ただたか 1745-1818）

江戸後期の地理学者・測量家、日本で最初の近代的測量による日本全図『大日本沿海実測全図』を作成。

伊能忠敬は延享 2 年（1745）に上総国小関に生まれ、幼名を神保三治郎といった。18 歳のときに下総国佐原、伊能家の婿養子になり伊能三郎右衛門を名乗った。伊能家の婿養子に入った忠敬は、酒造りなどの家業に精を出し、家運の挽回に努めた。持ち合わせた商才と勤勉さから、次第に家勢も上向きとなり、明和 3 年（1766）、天明 3 年（1783）などに相次いで起きた飢饉に際しては、窮民を救うことに心血を注ぎ、その結果、地頭から帯刀を許された。

49 歳のときに家督を長男景敬に譲り隠居、翌年寛政 7 年（1795）に江戸深川黒江町に移り住んだ。翌年幕府天文方、高橋至時（当時 33 歳）に師事し、暦学、数学の勉強を始めた。

忠敬は黒江町の自宅では、象限儀による天体観測をし、北緯 35 度 40 分 30 秒を得た。これは、後に陸地測量部が測定した値より、わずか 23 秒大きかっただけである。また、当時浅草にあった天文台（暦局）との緯度差から子午線 1 度の距離を得たが、より正確な子午

線 1 度の距離を求めたいとの欲望から蝦夷測量に出発したといわれる。江戸を出立したのは、実に 55 歳（寛政 12 年 1800）のことである。

その後、日本各地を昼は歩測や測縄と“わんからしん（小方位盤）”を利用した道線法や交会法で、夜は天文測量で位置を求め、これらをもとに地図化した。16 年間の測量に従事した日数約 3,800 日、測量距離約 44,000km、天文観測地点は 1,200 箇所にも及ぶ。その結果から編集されたのが、通称『伊能図』と呼ばれるもので、大図（1/36,000）214 面、中図（1/216,000）8 面、小図（1/432,000）3 面である。当初の目的であった子午線 1 度の弧長はというと、28 里 7 町 12 間（110.749m）という値を得ており、これは現在の値に比べ、おおよそ 0.2% の誤差という正確さであった。

当時、その結果を知った師の高橋至時は、測量結果には誤差の存在が考えられ、蘭書などの結果とも異なるとして評価しなかった。その後、フランスの天文学者ジェームス・ラランドの天文書のオランダ語訳である『ラランデ暦書』を手にした至時は、地球が南北方向につぶれた扁球形であることを知り、同書の子午線 1 度の値と忠敬の実測値がほぼ一致していることで、忠敬の測量の正確さを認め喜び合ったという。

伊能忠敬は、文政元年（1818）73 歳でこの世を去ったが、景保などの手で作成が続けられ 1821 年に『大日本沿海実測全図』として幕府に上程され完成に至った。

墓碑は、千葉県香取市牧野 1752 観福寺と、東京都台東区東上野 6-18 源空寺墓地にある。（「地図測量の 300 人」から）

高橋至時（たかはし よしとき 1764-1804）

江戸後期の天文学者、幕府天文方。

高橋至時は、大坂御蔵番同心、高橋元亮の子として生まれ、通称を作左衛門といった。麻田剛立（1734-1799）に天文学や暦学を学び、師の推挙を受けて間重富（暦学御用係）とともに幕府天文方となった（寛政 7 年 1795）。

江戸暦局に出仕した至時は、協力者であった間重富が京都の金工戸田東三郎らに作製させた象限儀、垂揺球儀（天文用振り時計）、子午儀などを使用して、京都で実測を重ね新暦、寛政丁巳暦を作成した。

改暦後も江戸に残った至時は、観測・研究を続け蘭書を読み、多くの著作を残しているが、中でもフランスの天文学者ジェローム・ラランド（1732-1807）の天文書『ラランデ暦書』の重訳に力を尽くし、『ラランデ暦書管見』第 1 巻を著したが、そのときの過労から、愛弟子忠敬作成の『日本東半部沿海図』の上程を見ずに 41 歳の若さで病没した。

『ラランデ暦書』の重訳は、その後子の渋川景佑、間重富、通詞馬場佐十郎らがあたり、彼らは全翻訳について断念したが、同書をもとにした『新巧暦書』全 40 巻を完成させた。

そして、伊能忠敬の行った偉大な測量・地図作成は、至時に師事したことによって始まっている。当時、至時は地球の大きさについて、その 1 度の長さを実測することによって確たる値を求めたいとの希望を持っていた。この時、弟子であった伊能忠敬が浅草暦局と深川黒江町との 1 分余を測定して、その値を推測したが、あまりにも短距離であることから、忠敬と語り大規模な実測を計画したのが全国測量の始まりである。全国測量に関して、彼は学問の上での指導をしたことは勿論、幕府との交渉、観測機器の作製などあらゆる面で指導と助言を与えた。このことから、両者を「近代日本地図の父母」と呼ぶものもある。

墓碑は台東区東上野 6-18 源空寺墓地にある。(「地図測量の 300 人」から)

正岡子規と自筆地図

科学者であり随筆家でもあった寺田寅彦(1878-1935)の作品に「子規自筆の根岸地図」があります。そこには、寺田寅彦の手元に正岡子規(1867-1902)が寝たきりで動けなくなったところに、仰向けに寝ていて描いたと思われる、自宅から友人の家までの道筋を教えるために書き記してくれた地図が残されていると記述されています。

寺田は、子規自作の地図から見える力強さに感心し、「正岡子規自筆根岸地図」とでも袋書きして大切に保存しなければならないと述懐しています。

さて、正岡子規が松山から上京し、母と妹を呼び寄せ住まいしたゆかりの子規庵には、「一束の地図」という彼が愛蔵した地図の束が残されています。「一束の地図」には、日本の官製地図が多いのですが世界地図も 5 枚含まれていて、これは書籍から引きちぎられたもののだといます。なぜ、大切な書籍から切り取ったのでしょうか。多摩美術大の平出隆氏は、松山市から上京する際に、書籍の重さのために必要部分を切り取ったのではないかと推測しています。となると子規と地図の係わりは、松山から始まるようです。

それを裏付けるように、「一束の地図」の中には、朱筆の入った地図のほか、手彩色がなされた 1/200,000 帝国図でしょうか『松山』があります。彼の手で彩色された松山の地図は、あの切り取られた世界地図と色合いが似ていて、これを手本にしたと考えられます。

子規もまた鷗外と同じように、日本にも「こんな地図が欲しい」と考えたのかもしれない。

子規は、幼少期から絵画に興味を持ちました。絵画だけでなく短歌にも「写生」の重要性を言っています。俳句に関して「地図的観念と絵画的観念」という文章も残しています(明治 27 年「日本新聞」)。そこでは、蕪村の「春の水山なき国を流れけり」について、内藤鳴雪はこの句から景色が浮かんでくると評し、子規は何ら絵が浮かばない観念的の句であると主張しました。主張の違いは、鳴雪が地図的観念で句を見ていて、子規自身は絵画的観念で見ているからだ結論付けています。

私が、この評論に説明を加えるのは恐れ多いのですが、それは地図における一般地形図と鳥瞰図の違いのようなものだと思います。子規から見ると、蕪村のこの句は、そのときの風景を多視点で拡がり深みを持つ鳥瞰図様に描いたものではないと言っているようです。

さらに子規は、「墨汁一滴」の中で、「この頃根岸倶楽部より出版せられたる根岸の地図は大槻博士の製作に係り、地理の精細に考証の確実なるのみならずわれら根岸人に取りてはいと面白く趣ある者なり」などと地図について評しています。当該地図は、明治 34 年大槻文彦作の「東京下谷根岸及近傍図」です。

後年永く病床にあった子規は、鷗外のように自ら立案した地図の刊行こそしませんでした。紹介した文章などの断片や地図への書き入れ評論によって、地図に対する思い入れの深さが感じられると思うのは「地図好き人」の鼻眞目のせいでしょうか。(【地図から散歩】— 「地図人」などにまつわる逸話 から)

木村信卿(きむら のぶあき 1840-1887)

現仙台市青葉区生まれ、フランス式地図作成を担当した参謀局地図課長。

木村信卿は、天保11年(1840)現在の仙台市青葉区柳町通で武士の子として生まれ、幼名を長信といった。8歳で藩校養賢堂に学び、10歳のときには経書の代講をするほど秀でていたといわれる。その後、仙台藩に出仕し洋兵学などを学び、安政4年(1857)に江戸へ出て洋兵学、蘭学、仏学などを学び、慶応2年(1866)には横浜でフランス公使館書記官に会話・翻訳を学び翌慶応3年に仙台へ帰った。

明治維新後は、新政府の命を受けて大学南校の得業生となり、その後大学少助教となっていたが、当時フランス式の兵制を採用していた陸軍に、仏語精通の腕を買われ招かれた。

その後、築造書の翻訳、兵営建築などに従事していたが、明治5年以降は兵要地誌の作成、兵語辞書編纂などを命じられ、陸軍少佐となった同6年には、参謀局から改変された第六局の編纂課長兼地図課長となり、日本で最初の陸軍図式『路上図式』を作成した(内容は不明ながら、という報告もある)。明治10年渋江信夫とともに116万分の1『大日本全図』を完成させた。このように木村信卿は、創生期の参謀局にあって、フランス語の知識を生かし、兵学で地図作成に功績を残し、地位を築いた。

ところが明治11(1878)年、軍政の調査・研究にあった桂太郎が二度目のドイツ滞在より帰国すると相前後して、一連の「地図売渡し事件」疑惑が起こる。明治11年木村は、これまでの功績にも関わらず、参謀局から改組された参謀本部での職を解かれ、同時に陸軍の兵制は、フランス式からドイツ式へと改革されていく。

明治14(1881)年1月29日、非職であった木村信卿と地図課の部下であった渋江信夫、木下孟寛、若林平三郎、小林安信は、日本全図を清国公使館に密売した容疑で拘引される。木村は、かねてより清国語のことで付き合いのあった公使館職員からの仲介で、清国公使何如璋(1838-1891)および黄遵憲(1848-1905)から日本地図の作製を依頼された。

黄遵憲から依頼されたのは、単に黄の自著『日本国志』に挿入するための日本全図であったともいわれる。

木村は、これを一旦は断ったのだが、断りきれず地図作製を部下の渋江信夫に依頼した。そして、その他の職員が地図作製に当たったというもの。事件は地図完成以前に発覚し未遂に終わったのだが、不思議なことに、事件の前に参謀局職員大島宗美と服部道門の二人が謎の死を遂げる。そして、同年5月3日参謀局で西画の指導をしていた川上冬涯が自殺? 更に拘留中の渋江も自殺する。

フランス派とドイツ派の対立が「地図売渡し事件」の裏にあったのだろう。じっさい参謀局からフランス派は一掃され、作成される地図からもフランス流の彩色は消えていく。

木村信卿は、事件後閉門停官し、晩年を石巻市で過ごした。

墓碑は、谷中霊園甲9号15側にある。(「地図測量の300人」から)

川上冬崖(かわかみ とうがい 1871-1881)

洋画家、参謀本部地図課員。

川上冬崖こと、川上寛(1827-1881)は、明治洋画壇の重鎮で、画塾を開き西洋画の普及に努めた一方、陸軍参謀本部地図課の職員として、フランス式近代地図として名高い『二万分の一迅速測図』の作成に画学の面から指導的役割を果たした人である。

冬崖は、文政 10 年（1827）信濃国福島新田村（現長野市北屋島）の農家山岸家に生まれ、12 歳のとき須坂の神社宮司の家に移り住み藩塾に通った。16 歳になって、神官の小河原家に望まれて養子に入るが、その家の娘との結婚を勧められたことを期に江戸に出た。

上野寛永寺の脇寺で働くとき大西椿年という南画の師に出会い、更に故あって幕府御家人川上家の婿養子となったことで、その後沼津兵学校を経て蕃書調所に出仕した。さらに、同所が開成所（明治 2 年）となるに及んで、絵心を見込まれ西洋画の研究に携わることになった。

明治維新後も、他の優れた幕臣と同様、新政府にも招かれ、再興された開成所に出仕し（明治 2 年）画学教授のかたわら私塾を開いた。この間、図画教本『西画指南』を著す（明治 4 年）とともに、のちに洋画壇で活躍する多くの門人を育てた。その後開成所を改組した大学南校を辞し、陸軍省兵学寮に出仕（明治 6 年 1873）、図画教育に当たる。

同 6 年、のちの地図図式にあたる『地図彩色』を、翌年には図画教本である『写景法範』を、続いて種々の実験を積み『東京近傍写景法範』を最初の石版本として刊行した。これらの風景や建造物、人物などをモチーフにした図画教本をもとに、地図作成や地誌調査に使われる図画教育が陸軍内で行われた。また、当時地図課では地図製図に従事する者として画家を採用しており、冬涯のみならず、浮世絵、漢画、日本画、水彩画、油絵、そして漫画をするものなど多彩な顔ぶれが揃っていた。

そうした明治 13 年、冬崖の教育を受けた測量師や測量手らによって、地図彩色と余白に描かれた色鮮やかなスケッチの記入で有名な「迅速測図」約 900 枚の作成が始まったのである。ところが、この地図作成の最中、陸軍の内部抗争ともいわれる、清国への「地図売渡し事件（地図機密漏えい事件）」にまきこまれたのだろうか。冬崖は熱海の療養先で、絵の具で体を朱に染めて自死する（明治 14 年 5 月 3 日、なぜか二週間後にもなってから「東京絵入り新聞」に自殺と報道された）。この死については、事件そのものがでっち上げであり、相前後して起きた参謀本部職員の謎の死と、陸軍少佐木村信卿らの逮捕拘留、その後陸軍の兵制と地図作成が彩色式のフランス式から単色のドイツ式へ変更されたこととの関連から、今なお種々の疑惑が取りざたされている。

冬崖の絵画作品は、長野県立信濃美術館が多くを所蔵している。

川上には絵画以外の貢献もある。万延元年（1860）、プロシアが幕府に石版印刷機を献納していた。そのデモ印刷のとき葵の御紋を印刷したという不謹慎さのことから？ その石版印刷機は、当時冬崖の勤める蕃書調所の奥深く仕舞われたままになっていた。維新後、冬崖は沼津兵学校、さらに陸軍省兵学寮へと転任するが、石版印刷機もまた同じ道をたどる。兵学寮に移った冬崖は印刷器械の埃を払い、説明書を翻訳し、現国立印刷局の前身である印書局にあったアメリカ人技師ポインドンに？（イタリア人技師とするものもある）直接教えを乞い石版印刷をものにした。この技術が、多胡実敏などを経て陸地測量部の石版印刷へと連なる。

墓碑は、谷中霊園甲 8 号 20 側の安立院前通り銀杏荘前にあり、正面『冬崖川上先生之墓』とある。（「地図測量の 300 人」から）

岩橋教章（いわはし のりあき 1835—1883）

鳥羽藩士、地図製図の先駆者。

岩橋教章（新吾）は、天保 6 年（1835）鳥羽藩士岩橋庄助の長男として生まれた。長じて、医師で洋学者であった安藤文沢に学ぶと同時に、狩野派を学んだという。家督を継いだ教章は、幕府操練所に出仕して、神奈川港の実測図調製に際しては絵図方助手として、江戸湾測量にも荒井郁之助らとともに従事していた。その文久元年（1861）10 月には、幕府御軍艦操練所絵図方出役に任じられた。

翌文久 2 年の幕府による伊勢・志摩、尾張沿岸の測量には、後に初代水路部長となる当時津藩の柳樹悦らとこれに加わったという。その成果は『伊勢志摩尾張付紀伊三河』となり、航海用沿岸海図の最初のものとなったが、岩橋も絵図方として、その一端を担ったに違いない。

その後横須賀沿岸などの測量にも絵図方として参加したが、大政奉還（1867）を迎え、荒井郁之助らと同様に榎本武揚と行動を共に戊辰戦争に従軍し敗戦、維新を迎える。維新後は、他の幕臣と同様に一時期謹慎するが、静岡学問所の図画担当教師を経て新政府に仕える。新政府では、兵部省や海軍省操練所などを経て、明治 5 年（1872）には、名を改めた海軍兵学校に日本画の大家橋本雅邦らとともに勤務している。

明治 6 年には、ウイーンで開催された万国博覧会に事務官随員として参加した後、銅版画や石版の技法をウイーン地図学校などで取得して翌年帰国した。

帰国後、紙幣寮、修史局を経て内務省地理局勤務となり、多くの銅版や石版技術者を育成したといい、この間に『地理製図式』（明治 9 年）、『測繪図譜』（明治 11 年）などの刊行にあたり、銅版技術を生かして内務省地理局編輯五千分の一の『兵庫神戸』、『横浜』の作成にもあたった。

明治 10 年『銅板絵入 懐中東京案内（福田栄造編）』には、「有名銅版所」や銅版を成すものとして岩橋教章の名がある。明治 12 年に内務省を退官し、麴町永田町の自宅に「文会舎」を開き、門弟に写真網目版の創始者堀健吉がいる。明治 14 年には、内国勸業博覧会審査官となり、明治 16 年に病死した。三重県立美術館には、ウイーンから帰国した翌年に病にあったとき、部屋の板壁に吊した見舞いの品の鴨を描いた『鴨の静物』が残されている。

墓碑は、東京都台東区谷中 7-5-24 谷中墓地乙 1 号 7 側 19 番にある。（「地図測量の 300 人」から）

村上島之允（むらかみ しまのじょう：秦憶丸：はたあわきまる 1760—1808）

『蝦夷島奇観』、『蝦夷地名考』などの著者。

村上島之允（秦憶磨（はたあおきまる）とも）は、探検家・測量家で間宮林蔵の師でもあった。伊勢国宇治山田に生まれ、地理に詳しく、画も巧みであった。天明 8 年（1788）松平定信に伊勢で見出されて、幕吏として各地をめぐり土木工事、絵図の作成に当たっていた。後に間宮林蔵とともに関東各地や蝦夷地を巡り、彼に地理・測量の指導をしたと思われる。

寛政 10 年（1798）から文化 3 年（1806）まで、普請役御雇いとして近藤重蔵らと蝦夷地を踏査、植林・農耕を指導し地図を作成し、初期の北海道開拓に尽くした。1807 年には、大目付中川忠英の巡察に普請役となって随員として蝦夷地を訪ねたのが最後の旅であった。著書には、『蝦夷島奇観』、『蝦夷見聞記』、『蝦夷地名考』などがあり、アイヌの習俗などを

忠実に紹介している。作成した地図としては、『蝦夷島地図』（1808）『東蝦夷地屏風』（1807）、『蝦夷地図・諸島図』などがある。村上貞助（1780－1846）は島之允の養子で、林蔵を助け『東燧地方紀行』などを編纂したといわれる。

墓碑（秦檜丸）は文京区谷中1－4 玉林寺にある。（「地図測量の300人」から）

「松浦武四郎の小さな庵」

伊勢の人松浦武四郎（1818-1888）は、幼少のころから遊歴を繰り返し、27歳のころからは蝦夷地を探検して「東西蝦夷山川地理取調図」（全28枚）などの詳細な地図を作成し、「東西蝦夷日誌」などの多くの蝦夷日誌を著したことはよく知られています。特に、「東西蝦夷山川地理取調図」は、主に海岸線だけの調査であった「伊能図」を補い、内陸の詳細な河川名・地名が記入されています。

それまでの松浦はというと、10歳のころから諸国遍歴の志を抱くようになり、天保4年（1833）には江戸に出て（家出といったもの）、これを実行に移し、17歳の時からわずか4年間で日本全国の名跡、山岳などをくまなく回るなど、根っからの旅行家であり、探検家ともいえます。

明治政府が樹立されると蝦夷地御用掛、開拓地判官に就きますが、探検家松浦は3年もしないうちに「高齢で現地に赴くことも適わない身であるから」といって、官を辞退します（52歳）。

それなのに、吉野連山や九州遊歴などを続け、68歳になってから大台ヶ原を3回踏破し、70歳になってからも富士登山に挑戦するなど、登山や旅に明け暮れる毎日でした。あの「高齢」は、どこにいったのでしょうか。

それはそれとして、明治政府の役職から離れてまもなくの明治6年55歳のとき、彼は神田五軒町（現在の外神田、「神田明神」の周辺）に新居を構えました。そして、明治19年になると、その家の一隅に一畳間書齋といったものを建て増しました。この小さな部屋を造るに当たって、古色溢れた寺院の古材を柱に、日焼けした神社の板切れを床の間板へと使用したのだそうです。それは、奈良春日大社、駿州久能山稻荷社、伊勢山田外宮、西京東山東福寺仏殿ほか多数の神社仏閣の由緒ある古材でした。

リサイクルショップなどのない時代に、そうした各地の古材をどうやって集めたのでしょうか。

それは、諸国遊歴で知り合った各地の友から贈られたものだといえます。古材収集癖がある？ということ、友人らが知っていたということでしょうか。探検家松浦は、全国に広がる確かなネットワークを持っていたようです。

晩年は、古銭蒐集や考古学にも関心を寄せていたといえますから、この日向の一隅で古銭を広げ、書をめくっては過ごしたのでしょうか。そして、柱の一本、壁板の一枚に目をやっては、各地に住まいする旧友のことを思い出していたのです。

命尽きたときは、この古色蒼然とした木材で亡骸を焼き、遺骨を大台ヶ原に遣ってほしいと言いついたといえます。だが、子息は父の形見として一畳敷書齋を大切に保存しました。その後、その小さな庵は武四郎の遊歴を思わせるように港区の徳川邸から、数回の移転を経て、三鷹のある実業家の別荘へと旅をして、東京都三鷹市にある国際基督教大学の敷地内に移築されて、国の登録文化財として残っています。

亡骸のことは、大台ヶ原山の名古屋谷に分骨碑が建てられていますから、その遺志は半ば適えられたようです。（【地図から散歩】— 「地図人」などにまつわる逸話 から）

**** オフィス 地図豆 yamaoka mitsuharu ****